



監督＝降旗康男／原作＝なかにし礼／出演＝常盤貴子／伊勢谷友介／香川照之／布袋寅泰／エレナ・ザハーロヴァ（東宝配給／2003年日本映画／111分）

1945年8月15日の日本敗戦。この日を境に満州国の状況は一変した。『風と共に去りぬ』のスカールレット・オハラを彷彿させる、強くたくましく生き抜く力を持つと共に、美しく、恋多き女、森田波子を演じるのは常盤貴子。彼女は原作者なかにし礼の実の母親だ。自律的（自立的）に、いかなる困難な状況となっても毅然と生き抜く、日本には珍しい女性波子を見事に演じている。常盤貴子の代表作となることまちがいのないオススメ作だ。

私の問題意識——「戦後58年」

日本は、2003年12月、自衛隊のイラク派遣を決定し、さらに、憲法改正に向けた議論も少しずつ本格的になろうとしている。1945年8月15日の日本敗戦から2003年の今は既に58年が経過した。いろいろな大学で『都市法政策』の講義を担当している私の最終的な問題意識は、「戦後58年、日本の民主主義は機能しているか？」ということだ。2003年12月5～8日の4日間にわたって実施した愛媛大学法文学部における『都市法政策』の集中講義で、私は映画評論のネタをたくさん使ったが、中でも『スパイ・ゾルゲ』（03年）の時代背景を20歳前後の学生に詳しく説明した。しかし、今の学生諸君には、満州事変や満州国そして日中戦争やノモンハン事件等は、よほど歴史に興味を持って勉強している人でなければ理解できない話。したがって、1945年8月8日のソ連の日本への宣戦布告と翌9日の満州国への侵攻の開始、そして8月15日のポツダム宣言受諾、8月18日の満州

国皇帝溥儀の退位による満州国の消滅等の動きも過去の歴史上の物語のはずだ。しかし戦後58年を経た現在の日本は、この戦争の時代を学習することなしには語るができない、と私は考えている。

原作は、なかにし礼の小説『赤い月』

この映画の原作は、直木賞作家、なかにし礼の書いたベストセラー小説『赤い月』。彼は、「この小説を書くために生きてきた」と断言し、また、「すべては本当に起こったこと」と言っているように、この小説は彼の実体験にもとづく物語だ。

その舞台は満州。ヒロインの森田波子（常盤貴子）は夫、森田勇太郎（香川照之）とともに日本敗戦の10年前の1935（昭和10）年、北海道の小樽から新天地の満州国の牡丹江^{ぼたんこう}に渡り、一代で「森田酒造」を築き上げた。しかしこれは、かつての波子の恋人であった、関東軍参謀大杉寛治（布袋寅泰）の援助や関東軍そのものの後ろ楯によるものだった。したがって1945年の日本敗戦とともに、この森田酒造は「崩壊」し、ヒロインたちの苦難の途が始まった。

すばらしいヒロイン常盤貴子

しかし、なかにし礼の実母である森田波子は、この時代の日本女性には極めて珍しいタイプの女性だったようだ。それはあたかも、『風と共に去りぬ』のヒロイン、スカーレット・オハラのように、美しくたくましく、そして何よりも愛に生きてすばらしい女性だったと思われる。このヒロイン波子を演ずるのは、常盤貴子。美しいだけでなく、強烈な意志力と現実を生き抜くたくましさ**と**強さを持った女性を演ずる女優としてはまさに最適。見方によっては、奔放でふしだらな女と言われてもやむをえないような森田波子の役を見事に演じている。とりわけ、夫の死亡を確認した後、今は阿片によって廃人同様となっている氷室啓介（伊勢谷友介）を、必死の看病で回復させた上、その氷室と結ばれる姿を子供たちに目撃されながら、その子供たちに対して、「あなたたちの命と母さんの命はつながっているの。ひとつの命なのよ！ 私が死んだらお前たちも死んでしまう。だから私は生きなければいけない。そして生きるためには愛し合う人が必要

なのよ」と語りかけるシーンは圧巻。悪くいえば「開き直り」ともとれるセリフだが、常盤貴子演ずる波子が、まともに子供たちに対してこのように語りかけ、これを納得させてしまうのだから、これはすごい一言。

さらに出征する長男を多くの関係者が「万歳！ 万歳！」の大合唱で見送る中、一人波子だけは「万歳！」と叫ばず、「自分の息子を見送る母親には、誰も本心から万歳なんて叫ぶ人はいない！」と断定し、そのウサばらしのため、一人、男とのダンスに興じている。こんな母親も珍しい。

『ゲロッパ!』（03年）での常盤貴子もよかったが、この『赤い月』でのヒロイン役は、彼女の代表作になるだろうという予感がする。

波子を取り巻く3人の男たち

波子はスカーレット・オハラと同じく、「恋多き女」。今は森田勇太郎と結婚し、子供3人をもうけているが、森田勇太郎の過去の恋敵は、帝国陸軍人で今は中佐に昇進し、関東軍参謀となっている大杉寛治。敗戦直前の1944（昭和19）年、森田酒造が主催したパーティーに出席した大杉は波子とキワどい線まで発展……。しかしそこは良識ある帝国軍人。「責任の持てないことは、日本男児としてやるべきではない……」と実にご立派……。

波子のもう1人の「彼氏」は、商社マンで森田酒造の担当という触れ込みだが、実は関東軍の秘密諜報員という恐い役柄の氷室啓介。しかしこれが、今風に言うと、ちょっとニヒルでクール、そして若くてハンサムで長身、しかも剣道の腕が立つうえダンスもお上手というような男。だから、変わりモノ好き（？）の波子には実にピッタリ。最初に紹介された時からお互いに興味を示し、折りにふれて……。ところが波子もオンナ。この氷室と、森田酒造で子どもたちにロシア語の家庭教師をしているエレナ・イヴァノヴァ（エレナ・ザハーロヴァ）との「濡れ場」を目撃した波子は嫉妬に身を焦がし、エレナはソ連のスパイだと関東軍にタレ込んだ。ここから話がややこしくなった。

終戦直前、エレナは関東軍に逮捕され、なんとその隠れた恋人の氷室がエレナの首を切る役割を……。そしてこの罪の意識に苛まれた氷室は、民間人において我先に本国へ逃げ帰ろうとする関東軍を尻目に、自己の罪を償うべく独自の行動

を開始したが……。

日本映画に珍しい大河ドラマ

この映画のメインの物語は、1945年8月9日のソ連の満州国侵攻から始まる脱出劇。しかしそこに至るまでの満州国や関東軍そして1935年から10年間にわたる森田酒造の繁栄ぶりがうまく対比されて描かれている。満州国の牡丹江を拠点とした森田酒造は大きな屋敷をもち、パーティーではジャズが流れ、ダンスに興じるといふ日本本土では考えられないような生活を謳歌していた。純粋に新天地満州を夢見て日本本土から大陸に渡った人達は、たくさんいたはず。当時の「五族協和」「王道楽土」というスローガンは、決して偽りではなかったはずだ。しかしソ連の対日宣戦布告により事態は一変。波子たちはただひたすら脱出すること、そして生き続けることだけがその目標となった。こんな大きな歴史の節目を迎えながら、家族を愛し、男たちを愛し、強く生き続ける波子の姿は、日本映画ではまずお目にかかれぬ大河ドラマのヒロイン役であり、実に感動的。見事な仕上がりとなっている。

波子の生き方には学ぶことがいっぱい

満州国は、日本が他人の土地に勝手に乗り込んでいき、地元の人達を抑圧してつくった身勝手な国であることは歴史的に自明のこと。しかし1932（昭和7）年3月、満州国が建国された時、そんな風に思う日本人はごく一部の例外を除いて、誰もいなかった。一般国民のほとんどが新天地に「王道楽土」を夢見たのは当然だった。その中でも森田勇太郎の妻の森田波子は、この新天地で自分たちの夢を実現するべく懸命に努力を続けた。森田酒造の成功は、波子たちのこの前向きの努力の賜物だ。たとえそれが「関東軍」の後ろ楯によるものであったとしても……。

しかし1945年8月15日を境にすべてが逆転した……。そして日本敗戦の翌年1946年4月から、日本人の満州国からの引揚げが開始された。波子は2人の子供を連れて、引揚げ列車に乗り込んだが、その引揚げ列車でのシーンは印象的。多くの日本人引揚げ者は、「俺たちは国に騙された。俺たちの満州国での10年は一

体何だったんだ！」と不平不満をぶちまけ、今や「紙切れ」となった満州国の紙幣をばらまいた。しかし波子はこれとは全く違う考え方をもっていた。すなわち波子は、「私は国に騙されてここへ来たのではない。あくまで自分の意志で満州国に来た」と言うのだった。これは今風に言えば、「自己責任」ということだが、あの当時の日本人女性の中に、このような自律的（自立的）な考え方をする人物がいたことは新鮮な驚きだ。このような考え方で毎日を生きてきた波子なら、日本への引揚げが完了した後も立派に生きていくことができるだろうし、2人の子供たちもこの波子の生き方を学ぶことだろうと確信できる。自律的（自立的）意思を十分もたないまま、集団的に右へ左へと揺れながら流されていく日本人が多い中、このような波子の「自律的（自立的）」生き方から学ぶべきものは多いと私は思うのだが……。

2003(平成15)年12月24日記

ミニコラム

満州に描いた夢あれこれ

満州を舞台として日中戦争を描いた映画やドラマは多いが、日本側からこれを描く場合は、平和憲法下での日本の戦争観や中国の反日感情など、いろいろな問題に神経を使わざるをえない。しかしその分、山本薩夫監督の『戦争と人間』3部作（70～73年）はじめてとする完成作には、「あの時代」「あの戦争」を考えさせてくれる名作が多い。『赤い月』が最新の感動作なら、ひと昔前の感動作は『落陽』（92年）。この映画を理解するには、「関東軍」「五族協和」「王道楽土」「石原完爾」「大陸浪人」等のキーワードの勉強が不可欠。また、現役女優から今や

文筆家となった感が強い檀ふみの父親である檀一雄の長編小説を映画化したのが『夕日と拳銃』（56年）。私は東千代之介主演のこの映画は観ていないが、1964年の工藤堅太郎主演のテレビ版を観て、ひどく興奮したことを覚えている。2004年8月、日本経済新聞の「私の履歴書」には、山口淑子が登場した。劇団四季のミュージカル『李香蘭』はこの山口淑子をモデルとし、李香蘭と男装の麗人川島芳子の人生をドラマティックに描いた感動モノ。『赤い月』の観賞を契機として、もっとも「あの時代」「あの戦争」の勉強を深めていきたいものだ。